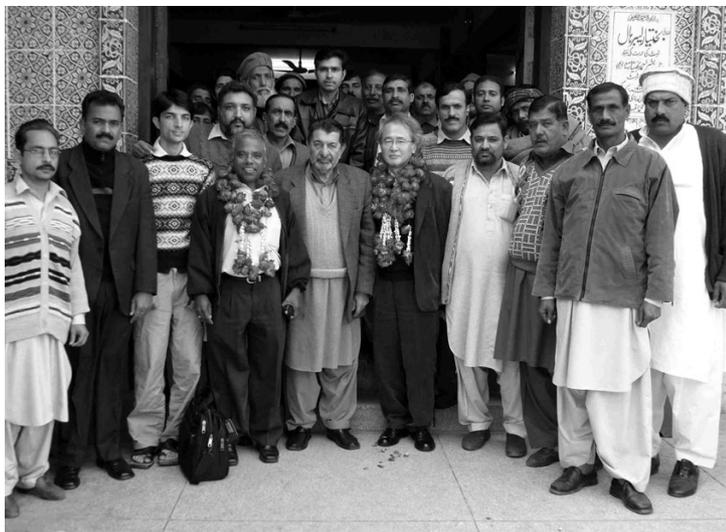


パキスタン 金属労働組 合運動近況

PWF本部のあるバクティアル労働会館前で歓迎を受ける。



はじめに

世界第6位の人口を抱えるパキスタンは、大国インド、中国、また世界の火薬庫となりつつあるイランと国境を接し、地政学的に非常に重要なポジションにある。イスラム教徒の多さでは、インドネシアに次ぎ、世界第2位でもある。パキスタンは、封建制度と独占資本主義によって支配されてきたとされ、政治面で見ても、1947年イギリスから独立して以来、現政権を含め、半分以上の期間が軍事政権下にある。社会的にみても、政党、民族、宗教、派閥主義が種々の分断の原因となつていとも言われている。経済的には、種々の規制緩和、官営企業の民営化が急速に進められており、市場経済化が進行している。このような環境変化は、労働組合運動にとっては大きなチャレンジであるが、組合組織率（推定も6%と低く、労働者の声を有効に反映するにいたっていないようである。このような状況下、2005年9月、全パキスタン労働連盟（APFOL）（※注1）、全パキスタン労働組合会議（APTUF）（※注2）、パキスタン全国労働組合連盟（PNFTU）（※注3）の3全国組織が合併し、組織人員88万人のパキスタンで最大のナショナルセンター、パキスタン労働者連盟（PWF）が誕生した。PWFは、パキスタンの組織労働者の70%を代表するとされているが、分裂が常態化していたパキ

スタンの労働運動にとっては、画期的な出来事と言つて良い。

IMFの加盟組織

1972年に2組織がIMF加盟を果たしているが、現在は、以下の3組織が加盟している（※注2）。

- APFTU—ナショナルセンターとして加盟、3万4千人
- パキスタン自動車・機械・金属労働者連盟（PAEMF）—PNFTU加盟、1万1千500人
- パキスタン金属労働者連盟（PMF）—いづれのナショナルセンターにも属さず、6千人。

2006年6月に刊行されたPWF「5カ年戦略」（2006-2010）（※注3）は、21項目からなる戦略目標を掲げているが、その1つが、PWF内に産業別組織を結成することである。産業別組織結成は、2007年1月にスタートし、2008年12月末までには完了する、とされている。



● IMF（国際金属労連）書記次長

鎌田 普 かまだ・ひろし

72年IMF-JCに入局。調査局で国際金属労組の賃金・労働条件比較を担当。75年IMF本部へ派遣。特別企画部長をはじめ、自動車、航空宇宙、電機電子、事務技術職など各種産業担当部長を歴任。95年IMFシニア・エグゼクティブ・オフィサー（SEO）に就任し、地域組織機構、地域事務所、財政、人事、総務を担当。05年6月にIMF書記次長に就任（現）。

IMFパキスタン ミッション

昨年開催されたIMF南アジア地域会議において、パキスタン加盟組合の状況について憂慮の念が示され、IMFとして状況把握のための代表団を送ることが提案された。この提案に基づき、本年1月末IMF代表団がパキスタンに派遣されたが、その目的は、以下の通りであった。

- IMF加盟組合の現状を把握すること。
- PWFの結成にかんがみ、APFTUとPAEMFのPWFとの関係を把握すること。
- IMFパキスタン協議会（IMF-PC）の状況を把握すること。
- IMF加盟費納入問題を明確化させること。
- IMF未加盟の金属労組とコンタクトを取ること。

IMFパキスタン 協議会（IMF-PC）



PWF本部での代表者会議で挨拶する筆者。筆者の向かって右がクルシッド・アーメッドPWF書記長、左がアルナサラム・MF東南アジア地域事務所代表。

- (注1)英語組織の英語名は以下の通り：All Pakistan Federation of Labour (APFOL), All Pakistan Trade Union Federation (APFUF), Pakistan National Federation of Trade Unions (PNFTU), Pakistan Workers Federation (PWF)
- (注2)国際産業別組織 (GUF) の中にはパキスタン1国から19組織を加盟させているところもある。業種の広がりなどGUF間には差はあるが、国際産業別組織への加盟については、一国での労働戦線統一に寄与する形での加盟を基本とすべきであろう。
- (注3)Building and Strengthening the Labour Movement in Pakistan—FIVE YEAR STRATEGY (2006-2010), Pakistan Workers Federation
- (注4)APFTUは、ICFTU加盟組織でもあった。
- (注5)旧APFTU書記長でもあった。

加盟組合の現況

1999年、IMFの働きかけにより、加盟3組織の協力関係を促進・強化するため、上記IMF加盟3組織をメンバーとするIMF-PCが結成された。しかしながら残念なことに、協議会結成以降、1回の会議も開催されない。パキスタンの複雑怪奇な状況を反映していると言ってしまうまでもないが、協議会結成の趣旨に沿った行動をとる意思が参加組織に欠如していたことは明白である。IMF-PCの近況を把握するために召集された今回の会議でも、協議会を復活させるための積極的な意見は、全く聞かれなかった。

IMF加盟3組織中最大の組織は、APFTU(※注4)である。APFTUは、2005年9月、PWF結成をもって解散し、現存しない。したがって、APFTUのIMF加盟関係は、見直しを余儀なくされる。PWF書記長(※注5)は、旧APFTUは、PWFの一部であるのだからPWFを自動的にAPFTUの後継IMF加盟組織として認めて欲しいというものであった。これに対しIMFの意見は、新しく結成されたPWFは、ナショナルセンターであり、産業別国際組織に直接加盟するのは、組織的にみて妥当ではない。PWFの下にその構成組織である旧APFTU、PNFTU、APFOLの金属関係労組をもって「金属労連」(仮称)を結成し、その組織が新たにIMFに加盟すべきではないか、というものであった。また、PWFが自動的にAPFTUに取って替わることは、論外であるとした。GUF(Global Union Federation)

の中には、ナショナルセンターであるPWFを加盟組織としていたところもあるが、ITUCに加盟している全国組織が同時にいくつかの産業別国際組織に加盟するのはおかしい、というのがIMFの立場であった。ラホールでPWFの責任者と話し合いを持った際、この懸案についてのつめを行ない、PWFの下に「金属労連」が結成されるまで、APFTUの後継組織を「PWF金属部門」として扱うことで合意を見た。

キスタン自動車・機械・金属労働者連盟(PAEMF)

PAEMFは、強力な指導者が組織運営の中心になっていた。しかし2004年この指導者が急逝したことにより、組織が3つに分裂し、それぞれがIMFに後継の正当性を主張してきたのである。親分亡き後、自分による組織のぶんどり合いである。IMFとしては、当該問題は当事者間で解決すべきである旨を繰り返してきたが、PAEMFが旧PNFTUの加盟組合であったことから、組織論的にみればPWFの下に設立が待たれる「金属労連」に参加するのが順当である。しかしながら、PAEMF内には、カラチを拠点にするもう一つのIMF加盟組合、パキスタン金属労働者連盟(PWF)に近い一派もいることから、PAEMFの今後は予断が出来ない。

キスタン金属労働者連盟(PMF)

IMF加盟3組織中最小で、いずれのナ

ショナルセンターにも属さない組織がPWFである。従来PWFは、加盟費支払い問題も無く、3組織の中では、優等生といっても良い。しかし、この組織は、カラチをベースにした一地域組織で他のパキスタン地域をカバーしていない。また、組織運営の拠点も不明確である。

金属労働戦線の今後の見通し

以上、IMF加盟の3組織の現状と問題点を見てきたが、今後の見通しに付き、いくつかポイントを挙げてみたい。

- PWFが労働戦線統一の核となれるか否か。また、その下に独立した「金属労連」が結成されるか否か。またその金属労連がどの程度の求心力を発揮できるのか。
 - 特定のリーダーに頼りきりの、また、利己的な組織運営が克服出来るか否か。
 - 脆弱な財政基盤を強化するための措置が講じられるか否か。
 - ガラス張りの組織運営が出来るか否か。
 - 地域組織から全国組織への転換が出来るか否か。
- パキスタン労働組合運動は、3分の1以上といわれる貧困層の解消、富の偏在の解消、封建的な社会制度の改革、地域主義・派閥主義の解消、など全国的な課題への貢献も求められている。
- IMFは、引き続きPWFの今後の活動を注視していくと共に、金属労働組合組織が協力関係を強化できるような支援プログラムを展開していく計画である。
- (4月26日、Carougeより)